

## あしあと

間野正己（機械工学科・1999年退職）



間野正己「あしあと」  
(1999年)

私は1987年4月から1999年3月まで12年間、近畿大学工学部機械工学科教授を勤めた。担当は機械工作法などであった。専門の造船に関しては「造船工学大意」があったが、機械工学科の学生は興味を示さず、<sup>やが</sup>臆て消えてしまった。

私は、大学は教授が教えるのではなく学生が学ぶ所だと理解していた。そして大学教授の勤めは、研究が第一でそれに教育と社会奉仕が付随していると思っていた。その上に大学の研究は金を使わずに頭を使うべきだと思っていた。金を使う研究は企業がやってくれる。このような考えのもとに教授生活を送った。

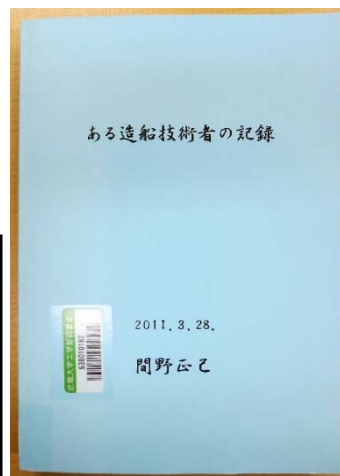
造船関係の講義は無くなったが、研究は以前からの造船関係を続けて論文を世界中で発表した。最初の頃、外国では「野球の近畿大学ですか？」と云われていたが、終わりごろには「造船科には学生が何人いますか？」と云われるようになった。

講義は90分の内60分で済まし、あとの30分は質問・討論にあてた。試験は試験範囲で最も重要な問題を出した。その問題が理解できればOKである。採点結果不合格であれば再提出させて、理解する迄指導して60点を与えた。入学試験と違って理解しているかどうかを確かめるのが試験の目的であるとの考えからである。

本書の最後に“最終講義”の概要があるが、後輩への伝言と思って読んで頂ければ幸いである。本書はこの12年間の教授活動を纏めたもので、当時の前工学部長塩田教授と深谷教授のご尽力によって、私の退職記念として出来上がったもので、“まえがき”と“あとがき”を夫々頂いている。12年間に活字になった記事は80件余りあるが、本書に採用したのは随筆23編、海外見聞録15編、技術解説8編、技術論文5編、その他5編となっている。その他の中には指導した卒業研究のリストも含まれている。

なお“ある造船技術者の記録”P.86の「私の大学教授生活」を参考にさせて頂ければ幸いである。

あしあと「最終講義」から <https://buturi.heteml.jp/mano/>  
 ・悲観論（調子の悪い方）は「・・・だからできない。」と言うんです。  
 楽天主義（調子の良くなる方）は「それではこうすれば出来るようになる。」と考えるんです。  
 ・勉強ほど面白いことはない。新しいことが分かり、社会に出れば物が作れる。楽しめば仕事も勉強も疲れなない。



間野正己「ある造船技術者の記録」(2011年)